難波方、鹽干勿有曾禰、沈之妹之光儀乎、見卷苦流思母、

〔萬葉集四相聞〕大伴宿奈麻呂宿禰歌二首〇一首略

難波方鹽干之名凝、飽左右二、人之見兒乎、吾四乏毛、

〔萬葉集七雜歌〕攝津作

難波方、鹽干舟立而、見渡者、淡路島爾、多豆渡所見、

〔神樂歌〕大前張　難波潟

本　なにはがた、をほみちくれば、あまころも、あまごろも、

末　あま衣たみの、をまに、たづ鳴わたる、たつ鳴わたる、

〔土佐日記〕六日〇承平五年二月　みをつくしのもとよりいで、なにはにつきて、かはじりにいる、〇中略　かのふなゐひの淡路のしまのおほいご、都近くなりぬといふを悅びて、舟底より頭をもたげてかくぞいへる、

いつしかといぶせかりつる難波潟葦こぎそけて御舟きに鳧

〔萬葉集七雜歌〕羈旅作

年魚市方、鹽干家良思、知多乃浦爾、朝搒舟毛、奥爾依所見、

尾張國年魚市潟

〔佳境遊覽二古蹟名所〕鳴海里　成見、成海、自熱田巳方一里半有潟、名鳴海潟、如潮滿則行人通上野、今則改路、平陸而不入、滿潮最安、而無行人煩也、

鳴海潟

〔十六夜日記〕暮かゝるほど、きよみが關をすぐ、岩こす波のしろきぬをうちきするやうにみゆるいとおかし、

清見がた年ふる岩にことゝはむ波のぬれ衣幾かさねきつ

駿河國清見潟

〔東關紀行〕清見が關も過うくて、をばしやすらへば、沖の石村々鹽干にあらはれて、波に咽び、磯の